



169号

2011/12/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)

◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。



毛家の年越し準備(豆腐作り)2009年1月

撮影:丹羽朋子

‘わんりい’ 169号の主な目次

北京雑感(60)北京の老人たち	2
私の調べた諺・慣用句5「破竹の勢い」	3
媛媛讲故事(39)怪異シリーズ⑧「不思議な夢・二題」	4
農民画家“馮山雲” フォンシャンユン 「小程村から出発して(後編)」	6
読む(82)「この国のかたち」	9
紙上展覧会「中国年画展」Ⅱ	10
中国-城市めぐり(11) 張家界(武陵源)と鳳凰古城	12
スリランカ紹介(53)デヒワラ動物園にて	15
アフリカの日々(58)「ポレポレ建築物語」	16
‘わんりい’活動報告「第5回漢詩の会」	17
福建見聞録⑩「日本語を学ぶ学生たち」(続)	18
留学生作文「中国と日本の似ているところと違うところ」	19
私の四川省一人旅(51)草原の中の街・塔公Ⅱ	20
松本杏花さんの俳句集・千里同風より	23
‘わんりい’活動報告「2011夢広場」	23
‘わんりい’掲示板	24

【表紙写真説明】

農歴12月24日、陝北の桑<sup>サンフー</sup>注村で初めて過ごす年越し準備は豆腐作りから始まりました。商店がない村では月に3度のマーケットへも一日がかりで牛車で行かねばならず、毛家では油や酒、調味料以外の食料はほぼ自家製です。時間がかかる豆腐づくりは、年飯(お正月料理)準備の大切な仕事。

写真は煮た緑豆を圧搾機に入れて、豆乳とおからにわけ作業風景。孫のペイペイも、轟音とどろく機械の傍らで楽しそうにお手伝い。出てきた豆乳は大きな鍋で煮詰めた後、漉して水分を絞ります。作業は毛さん夫妻のあうんの呼吸で手際よく進んだものの、ちょっと焦げた匂いがあったのに料理自慢の奥さんはしょんぼり。

外に干す前に気をとりなおして出来たてホカホカの豆腐をちょっと味見。どっしり噛みごたえのある食感とやさしい味にみんなの顔がほころびます。これから大みそかまで、料理の他に剪紙や春聯の準備、大掃除やお墓参り…と一家をあげて大忙しの年越し準備が続きます。

(丹羽朋子 中国民間芸術研究に従事)

ものの本に依ると、中国は2030年までに日本を追い越して、世界一の高齢化社会になるそうです。

1979年から実施している一人っ子政策の帰結として、急速な高齢化社会の到来は避けられない現象です。尤も、この一人っ子政策、少数民族は適用外として、少数民族が民族としてますます少なくなるとの不満を和らげようとしているそうです。また、農村では、地域によって、罰金(税金)を払えば男児が生まれるまで複数の子供を持つことが許されることもあり、中国では一般的な「上に政策あれば、下に対策あり」の実例かも知れません。

余談ですが、この「上に政策あれば下に対策あり」と言う言葉、外国人の我々が使うと、中国に対してちょっと非難めいた感情が滲みますが、中国の人々自身もよくこの言葉を使います。その真意は、国の政策は政策として、各地方はその地域の実情に合った施策を行うのが良いというものです。日本と比べて省の権限が強い中国ですから可能なのでしょうし、また効果的な施策が打てるのでしょう。

ところで、この一人っ子政策、社会構成員の年齢分布が歪み、高齢化社会の到来を早めるだけでなく、子供に性格的欠陥が見られるようになったと心配する有識者もいます。一人の子供に両親とそのまた両親、6人の大人の期待がかかり、小皇帝として君臨し、豊かになるにつれて過度の甘やかしを受けて性格的な問題児が多くなったそうです。確かに、一人っ子政策は中国に難しい問題をもたらしますが、地球規模の人口増加と言う観点からすれば、その功績はかなり大きいと思います。

最近、世界の人口が70億人を突破したと話題になっていますが、中国が一人っ子政策をとらなければ、もっと早く地球上の人間は70億人に達したのではないかと思います。最近、中国政府も一人っ子政策の行き過ぎを是正して、一人っ子同士が結婚した夫婦には、子供の出産を二人まで認める制度に変更したそうですが、これなら急激に人口が増加すると言うことは無いでしょう。

中国社会の将来的諸問題の解決は、中国政府指導部の英知に任せるとして、現実の北京の老人達を見てみるとその生活は健康的で、羨ましく感じる点がたくさんあります。今退職しておられる方々は、大躍進・文化大革命・改革開放と激動の時代に社会を支えてきた人達です。中国では退職金が無い代わりに、月々の手当

てが退職時の給与の7、80%支給されるそうです。

勿論、物価の変動に対応しています。更に、夏季と春節前の2回、日本式に言うると盆暮に、元の職場が退職者向けに集会を開き、全員に油や粉などを支給し、家電製品や寝具など豪華な景品が当たる福引を行ったりします。尤も、この集会の内容は元の職場の景気に左右されず。経済的変動の大きい中、元の職場が潰れてしまったという人も多く、そういう人達はこの現物支給の恩恵は受けられません。この辺は運不運があって不公平です。

北京の街を歩いていると、公園の一隅や歩道の広くなった部分に金属製の運動具が置いてあり、老人達がそれぞれ気に入った道具で運動しているのをよく見かけます。

この運動具、宝くじの収益金で設置しているそうで、誰でも自由に使えます。野外で雨ざらしになるので、スポーツジムの機器のような測定器やクッションなどはなくて、金属だけで出来ていますが、機能的には同じような効果が期待出来ます。場所によっては、鉄棒や雲梯、低い平均台や飛び石等もあって、全部の器具をひと通り使うと、かなりの運動量になります。

北京の老人達は、朝早く公園に出かけ、グループで或いは独りで太極拳や気功をやり、更にこの運動器具を使って身体を動かし、近くの食堂で朝食を摂って家に帰ってから、友達と連絡を取り合って麻雀をすることが多いようです。太極拳や気功はしないで、散歩だけという人々もいますが、いずれにしても朝早くから外に出てきます。

中国の人々は朝食を近くの食堂で食べるのが習慣で、豆腐に葛引きの汁をかけた豆腐脳(dòufu nǎo)と小麦粉を練って油で揚げた油条(yóutiáo)、或いは豆乳と包子(パオズ=肉饅頭)、馄饨(húntun=ワンタン)などをかなりしっかり食べます。食堂で朝食を摂っている様子を見ていると、北京のお年よりは元気だなあとと思います。

北京の公園の朝は、また、京劇の曲を歌ったり、二胡や京胡を引きに来る人達もいます。グループではないのですが、それぞれに集まって来て教え合ったり、伴奏をつけたりして交流しています。拘束力の無い同好会といったところでしょうか。

このような活動が出来るのも、北京の公園が広くて石畳が敷いてあり、東屋や長廊等を備えているからでしょう。

スポーツのリーグ戦などの報道で、あるチームが相手チームを次々と負かして勝ち進む様子を見ていると、自分もスタンドの観客席で

「すごいなあ！このチーム!! まるで破竹の勢いだ。きっと優勝するに違いない」

などと隣の人と言葉を交わしたくなりませんか。

まずは辞書で「破竹の勢い」を調べてみましょう。

▲三省堂 現代国語辞典は、「破竹の勢い：竹を割るように一気につき進んで、とめようとしても、とめることのできない勢い」

▲小学館 中日辞典には、「勢如破竹(shì rú pò zhú):破

竹の勢い」

と掲載されています。

さて、この成語の出自は「晋書。杜預<sup>注</sup>伝」の、「今兵威已振，譬如破竹，数节之后，无复著手处也」の部分です。現代語に訳すとすれば、「今、我が軍の威勢は振るい、竹を裂くときのような勢いがある。ほどなく(呉軍は)武力の必要はなくなるだろう」といった感じですよ。

杜預は西晋時代の著名な将校で、嘗て鎮南大將軍・都督荊州軍事に封ぜられました。後に彼は、晋武帝に呉国を徹底的に滅ぼす為に出兵することを提案しました。

晋武帝は出兵の是非を即断できませんでしたので、直ちに文武各大臣を招集し、朝廷で出兵の是非について協議をしました。その結果多くの大臣達は出兵に反対をしました。

彼らの意見は次の点で一致していました。即ち呉国は強敵であり、今の時期は彼の地は天気も酷暑で暑さは耐えがたく、河の水は氾濫し、伝染病も発生しやすく、沼沢地での戦いに慣れていない我ら北方の兵士にとっては大変不利であり、確実に勝てるとは到底思えない。ここは一旦退いて来年の春まで待って改めて戦った

ほうが勝てる公算が大きいと思う。

杜預は彼らの考え方には同意できなかったもので、次のような話をしました。

「戦国時代、燕国の大将の楽毅は洛西の戦いの折に、一気に攻め続けて齊国の70を超える都市を攻め落したということだ。これは指揮が適切であったことの他に、兵士の士気が非常に旺盛であったことが主な原因であったのだ。今我々はすでに蜀国を滅ぼしたところで、兵士達の士気は非常に旺盛だ。この状況下で我々が出兵して呉国を攻撃するのは、丁度竹を裂くのと同じで、はじめに節を二つ三つ裂いてしまえば、あとは大して力を加えなくても、残りは自然に割れてしまうように、今出兵すれば勢いに乗って呉国に勝てるのではないか」

晋武帝は杜預の話は尤もだと思ったので、すぐに彼の意見に同意し、杜預を大将として呉国攻略に向わせました。

杜預はまたたく間に呉国を攻め落とし多くの都市を占領して、呉国の首都の建業も攻略し、ついに呉国を滅ぼしたのです。

〈注〉

杜預(222~284)：中国、西晋の武将・学者。杜陵(陝西省)の人。武帝の呉の討伐で戦功をあげた。著「春秋左氏経伝集解」「春秋釈例」 (goo辞書より)



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

## ★ 不思議な夢 (一)

蔣濟という將軍の妻はある夜、すでに死んでいる息子の夢を見ました。夢の中で息子は涙を浮かべて言いました。

「母上、私は父上、母上のいらっしゃる世界と別れてひとり冥界に住み、寂しい日々を送っています。生きている間は私は將軍の息子として、なにひとつ不自由のない幸せな生活をしていましたが、冥界に住む今の私は、泰山の下っ端の役人として、人々に仕え、苦勞の多い日々を過ごしています。その仕事の辛さは言葉では言い表すことができないほどです。ところで、最近噂に聞いた話ですが、泰山神を祀る廟の西側に孫阿という、間もなく死ぬ人がいます。その孫阿が死んだら、私の住む冥界の長官に封じられることになっているそうです。それで父上をお願いして頂きたいことがあり、母上のもとに参りました。母上から父上をお願いして、父上の息子である私にもう少し楽な仕事をさせて欲しいと、この孫阿に頼んで頂けますか」

妻はここで驚いて目が覚めました。この夢のことを將軍の夫に伝えましたが、將軍は「あり得ない話だ」と言って、全く信じませんでした。

翌夜、妻はまた息子の夢を見ました。

「今日私は、新しく赴任される孫阿長官を迎えに参りました。泰山の廟の下に泊って、仕事の合間を利用して母上に会いに来ました。明日の正午に新しい長官は出発され、私はお供して参ります。仕事はやりきれないほどありますので、これからは母上にお会いしに来ることは出来ないと思います。ぜひ私の願いを父上に伝えてください」

息子は再び母親に頼み、孫阿の姿をこと細かに描写して母親に話しました。息子は孫阿についてとても詳しいようでした。

翌日、妻はその夢をまた將軍である夫に報告しました。將軍は半信半疑ながら

「夢というものをどこまで信じてよいか分からぬが、息子が再度夢に現れてそういうなら、息子のために、頼んでみても良いかもしれぬなあ」と言いました。

そうして、將軍は部下を派遣して、泰山神廟の周辺に孫阿という人が住んでいるかどうかを調べさせました。その結果、孫阿という人が本当に住んでおり、孫阿の姿はまさに息子の言う通りでした。

將軍は吃驚仰天し、涙を流しながら言いました。

「我が息子よ、そなたの言うことを信じず済まなかった…」

將軍はさっそく孫阿を招いて、息子の夢のことを詳しく話しました。孫阿は自分がもうすぐ死ぬであろうことは泰然として受け止めたましたが、夢のことは信じられないような様子でした。

「息子さんの頼みをきいてあげられるかどうか今はなんとも申し上げられませんが、しかし、もし私が本当に死んで、泰山の長官になれたとしたら、必ず力になって差し上げましょう。しかし、息子さんにはどのような仕事をさせたいと思っていられるのですか？」

「息子は、自分が興味を持てる、楽な仕事であれば満足だと思う。是非何とかよろしく頼む」

と將軍が答えました。

孫阿は將軍の息子についての依頼を承諾すると帰って行きました。

將軍は、孫阿についての情報をすぐ知ることができるように、泰山神廟のあたりに自分の兵士を配置しました。

翌日の朝、孫阿は胸の痛みで苦しんでいるとの情報が届きました。そして、正午になると、孫阿は息子が告げた通り本当に亡くなったという部下からの報告が入りました。

將軍は「息子が若くして死んだことを思うと可哀相でたまらないが、その魂が今も家族の許にいるようで慰められる」と言いました。

一ヶ月後、將軍の奥さんはまた息子の夢を見ました。

「母上、私の仕事は以前よりずっと楽になりました。ご安心ください」

と告げました。その後、將軍の妻は再びそのような夢を見ることはなくなりました。

## ★ 不思議な夢 (二)

朝廷に、曾て李成季という「起居舎人」<sup>1)</sup>の職を務めた役人がいました。これは彼が幼い頃の話です。ある時、彼は熱病になりましたが、数日間もの間、汗が出ませんでした。寝ても、起きても気持ちが苛立って堪えがたく寝付くことができないでいました。「この暑苦しいベッドから脱け出て、涼しいところに行ければどれほど良いだろう」と李成季がそう思っていると、なんと本当に体が軽くなってゆらゆらりと浮き上がり帳から抜け出てしまいました。

さらに「庭の外はもっと気持ちいいだろう」と李成季が思うと身体が玄関をするりと抜けて町の中にさまよい出て行きました。

町の中をあちらこちら気ままにぶらぶらさまよっているうちに、ふと気が付くと広い野原にやって来てしまし

た。李成季は更に爽快な気分になってその野原を足取り軽く歩いていますと、まもなく町を囲む城郭が目の前に現れました。城郭の中に入ってみますと、道路や、市場や、家並みなど見慣れた町とさして変わらない風景が続いています。ゆっくり街並みを見物していたところ、不思議なことに、以前の知り合いで、既に死んでいるはずの、絹物を販売するお婆さんに出会いました。

このお婆さんは李成季を見掛けると、吃驚した様子で「あら、あなた、なんでここにいるの？ここは冥府ですよ」と言いました。

李成季は、お婆さんの言葉にびっくりしどうしたら良いのか分らず、お婆さんに助けを求めました。

お婆さんは「私もどうすることもできません。けれど、幸い私は絹を商っているので日頃、右判官<sup>2)</sup>の家に入出入りしています。試しに訪ねて訊いてみましょうよ」

と言い、李成季を連れて右判官の家に向かいました。

右判官の家の玄関に着くと、お婆さんは「門の外で、一步も動かないで待っててください。動くと本当に死んでしまいますよ」

と何度も念を押し、家の中へ入って行きました。

李成季は不安を感じながらもじっと待っていますとお婆さんが嬉しそうな顔をして中から出て来ました。

「話をうまく進めることができそうよ。ただ左判官様と相談しなければなりません」

お婆さんは言いました。

そして暫く待つうちに、馬のいななく声が聞こえ、緑の官服を着た若い男が馬を連れて出て来ました。

「この方が右判官ですよ」とお婆さんは囁くと、李成季を連れて男の後について行きました。間もなく一軒の屋敷に着き、赤の官服を着た男が玄関で出迎えました。この男が左判官のようでした。

緑の服の右判官は

「陽界にいる人の魂が誤ってここに迷い込んでしまいました。誰かに送り返させましょう」

と言いました。

赤服の左判官は

「冥界のものが間違っただけで連れてきたわけでもないのに、この人間はどうしてここに来てしまったのか。まあ、その議論はしても仕方のないことだが、もうここに来てしまっているのだから、わざわざ送り返す必要はないだろう」

と答えました。李成季は左判官の言葉を聞いて、ますます怖さが募ってきました。

右判官は重ねて言いました。

「ひょっとしたらこのものは将来偉い役人になるかもしれない。念のため、まずは帳簿を調べてみようではないか」「そんな面倒なことはしなくともよいではないか」

左判官はなかなか同意しませんでした。右判官が何度も提案しましたので、左判官は、しぶしぶながら下役に帳簿を持って来させ、李成季のページを開いて読み始めました。

「李一成一季、官位は起居舎人まで昇進する」

右判官は手を打って喜び

「どうだ、このものは、将来偉い役人になることがすでに約束されているではないか。われわれがその運命を損なうことをしたら大変なことになってしまうだろう」

左判官はばつが悪そうに、右判官と共に冥界を抜ける通行符を作って捺印し、一匹の小鬼を呼ぶとその符を渡し、「このものを陽界まで案内してあげよ」と命じたので、李成季はやっと安心し気持ちを落ち着かせることができました。お婆さんに重ね重ねのお礼を言うとお鬼について行きました。

陽界に戻る途中で、関所の小鬼に訊ねられたりしましたが、通行の符を見せ、無事に通過することができました。

道案内をしてくれた小鬼は頭に疥癬やできものがいっぱいあって、流れ出てくる膿や血液が臭くて耐えがたいようでした。しかし小鬼は痛みを感じないのでしょうか、大声で歌を歌って歩いているのでしたが、数十歩ほど歩くと「足が痛いよ」と訴えて、座り込んだりするのです。李成季は早く帰りたいと焦り、その度に何回も小鬼に哀願し、どうにか前へ進んで行きました。どのぐらい時間を掛けたのか分かりませんが、広い野原に来ました。

「おれはここまでしか送ることができない。後は通行符を自分で持って行きなさい」

とお鬼は言うとお通行符を地面に捨ててしまいました。

李成季は腰を屈めそれを拾おうと思った瞬間、足が何かに躓いて転んでしまいました。

と、彼ははっとして目が覚めました。実は彼は何日間も昏睡していたのだそうです。

李成季はその後、家の祭壇にお婆さんの位牌を立て一年中真剣に祈るようになりました。そして、成人した後、李成季は果たして朝廷の起居舎人の職に就き、在職中に亡くなったということです。

## ● 注釈

1) **起居舎人**：官名。皇帝の一日の行動、言葉、及び国の重大なことを記録して遺す役目を果す。

2) **審判官**：二人で左と右に立って共に裁判を行うので、左判官、右判官と呼ぶ。

### 馮山雲エッセイ、前回の振り返り

今回は、わんりいニュースレター 164号 (2011.6) に載せた中国・陝北地域（陝西省北部）、延川県の農民画家、馮山雲<sup>フォン</sup>氏のエッセイの後半部分をご紹介します。

馮さんは延川県の文化館で70年代末から働いた、民間芸術の指導者です。数多くの農民の手仕事のなかでも、彼は特に剪紙を「声なき農村女性の自己表現の手段」とみて重視し、多くの剪紙作家を育てあげました。

「小程村から出発して」と題されたこのエッセイは、彼が油絵画家、靳<sup>ジン</sup>之林（北京・中央美術学院教授）とともに、県の最僻の山村「小程村」を民間芸術の保護・発信地にするべく設立に尽力した、「小程民間芸術村」をめぐる回想記です。

前半部は97年から、彼が師である靳氏の風景画の写生地を探して黄河沿いをめぐるうちに小程村に出会い、電気のないこの村には女性たちの素晴らしい手仕事が残っていると知って、師に諭されながら村をまわって村人たちに聞き取り調査を行う中で、自らをあたりまえに囲んでいた農民文化の豊かな世界観に驚き気づいていく過程が綴られていました。そんな彼らの興奮とは裏腹に、女性たちは剪紙図案の意味を説明するのも恥じらい、口をつぐむ始末——。後半はいよいよ2001年、民間芸術村が出来る段階へと進んでいきます。以下、エッセイの抄訳です。

### 「油灯」の下での剪紙学習班

私たちは村をめぐって聞き調べた状況を行政村の幹部に伝え、靳先生は村で学習班を開き、小程村の民間芸術をきちんと伝承していくよう進言した。見込みのある村の女性たちを励まし続けるうちに頑な村人たちの心も開き、好奇心をもつ者も増え始めた。

だが靳先生の話、田舎者たちは理解できない。農民の文化指導に長年従事してきた私の力が発揮されたのはまさにこのときだった。生粋の延川方言で味つけして笑いを交えた「民間芸術」の話で興味を惹き、同時に靳先生のアドバイスが人々に届きはじめると、少しずつ効果がみえてきた。

やがて家主である程文の窑洞は毎晩、向こう谷からも人が訪れて室内からこぼれた人々が中庭に坐り込むほど盛況になり、まるで結婚式のような賑わいとなっ

た。隣村の七十代の程秀珍さんは毎日早々とやって来ては灯りの下に陣取り、長年しまいこんでいた沢山の剪紙をみせてくれた。「これは自分が何年も大切にしてきた古い型紙で、祖先から代々伝えられたものだ。あんたたちの役にたつかねえ」と程ばあさん。

靳先生は皆に見えるように程さんの剪紙を広げると、「これこそが古い黄河文化だ。まさか我が村にこんなにも古い黄河文化があったとは！すばらしい剪紙をもってきてくれた程さんに感謝！」と語った。

「いいって言うてくれるのはあんただけだよ。以前は外に出すなんてもってのほかだった。見られたら“四旧”といわれて命取りだった」程ばあさんは嬉しそうに答える。

「これこそ私達たちのもっとも伝統的な民族文化だ。今さら国が保護しても間に合わない」と靳先生。喜んだ程ばあさんは次に、結婚のとき自らが刺繍した枕をとりだした。配色や刺繍ともに素晴らしい出来だった。

手にとって私は「この花の刺繍にはなんでこんなにたくさん結びこぶがあるの？」と尋ねた。年とった婆さんたちはそれを聞くなり声をあげて笑った。「結びこぶのない刺繍は嫁いできた嫁が子どもを産まないようなもんだ」

靳先生は「学問というものは、問いながら学び、学びながら問うものだ。真剣に調べて初めて、真に学問を手に行ける」と嬉しそうに頷いた。その晩は夜が更けても誰ひとり帰ろうとせず、家主の程文は妻に度々灯りの油を注がせねばならなかった。

連日の大盛況に、程文はやむなく部屋の壁を壊して隣同士の二つの窑洞をつなげ、人が集まれるようにした。設備はないに等しく、集まった剪紙はたった一つだけの小さな卓袱台上にはひろげきれず、壁にまで貼りだされた。こうして熱気をおびた学習班は男どもさえも魅了し、民歌や秧歌で場を盛り上げ、靳先生もそこに違和感なく交じって夜な夜な楽しい時間が過ぎていった。

### 「民間芸術村」の看板がかかった日

小程村から徐々に、民間芸術で名を挙げる者が出だした。この知らせが県の上層部まで伝わると、宣伝部の幹部たちが視察にきて小程村の剪紙を買って帰るようになった。これは小程村の人々にとって天地がひっくり

返るほどの驚きであり、これまで自らを卑下してきた村人たちを、小程村に文化組織を作りたいと申し出るまでに活気づかせ、「小程民間芸術村」の設立が目指されることになった。この案をけしかけた老先生の狙いが的中したというわけだ。

だが現実には、場所が問題になった。貧しいこの村には共同利用の窑洞がなかったのである。程文が兄弟に相談して、古い土窑洞を提供して活動室に作り替えることを決めた。「民間芸術村ができたら県政府が電気を通してくれる！」そんなオイシイ知らせが村に伝えられるやいなや、金があるものは金を出し、力を貸せる者は労力を惜みず、小学生までもが学校そっちのけで作業に加わり、準備が進められた。

民間芸術村の完成を村人は指折り数えて待ちわびた。剪纸学習班以外にも秧歌隊が結成されるなど、民間芸術の活動はますます活発になった。程江という秧歌の名手は俄然忙しく動き回り、自身だけでなく家中の者が家業を措いてこの行事のために集まった。彼は秧歌のなかで自らをこう歌っている。

程江は何をやってもだめ人間/商売やっても  
お客は閑散

にぎやか大好きお祭り男、女房引き連れ馳せ参じ

「民間芸術村」設立の日が迫ると、女性たちは以前にも増して熱心に剪纸制作に打ち込んだ。郝秀珍の夫、安小も鉛筆を一本一本削って女房に差し出す。以前、彼は女房が絵を描くことに反対し、彼女の鉛筆をこっそりと折っては捨てていたが、状況は一変した。鉛筆削りど

ころか、食事の用意までかって出るようになったのだ。

中卒の郝秀珍は村の女房連中のなかでは学歴が高い一人で、小程村に嫁いで来てからも暇をみつけてはこっそりと絵を描き続け、後ろ指さされてもへっちゃらだった。肝っ玉の坐った彼女が靳先生の来訪をきっかけに剪纸をはじめると、彼女の積極性が村の女性たちに伝染していった。そんな彼女をみんなは民間芸術村の美術組長に選び、彼女の責任感は一層強くなった。

2001年12月13日は、小程村の人々にとって忘れ難い一日になった。この日、小程村には近隣のみならず、遠くは山西省の黄河沿いの地域からも山のように多くの人々が訪れ、山道は詰めかけた人々で動けぬほどだった。「バンバン、パンパン!!」と爆竹が鳴り響く中、靳之林先生はじめ幹部たちが村の入り口に高々と「小程民間芸術村」の看板を掲げると、集まった人々から割れんばかりの拍手が沸き起こった。「お静かに、お静かに！」というアナウンスも人々の歓声にかき消される。靳先生がすっと立ち上がり、手をふって人々を制するとようやく静けさがもどった。最後に程文が民間芸術村の村長になることが告知されると、人々は再び拍手喝さい、抑えきれずに程江が前に躍り出ると秧歌隊がこれにつづいた――。

### ✂️「民間芸術村」の看板がかかった日

「小程民間芸術村」設立の喜びさめやらぬなか、全国剪纸芸術年會がこの村を視察に来ることになった。2002年2月27日(農歴1月9日)、この日を小程村の人々は生涯忘れることはないだろう。市や県のみならず、中央



「靳先生の剪纸学習班」 賀彩蓮/作(小程村在住)



「電気が通った日」 賀彩蓮/作(小程村在住)

からも人がくるなんて、かつては想像も出来ない事だった。ましてや外国人までやってくるとは！村中の人々が家を清潔に整え、出来る限りのもてなしで客人を迎えようと、米酒、豆腐、焼き豚といった正月料理を準備万端、この日を迎えた。

当日、人々は朝も寒いうちから乾坤湾から聖覧山を望み、じっと待っていた。山の谷間から、カブトムシの隊群のように車が一台、また一台と砂埃を舞いあげ近づいてくるのが見える。村の幹部の合図で秧歌隊と村中の老若男女が一斉に列を組んで出迎え開始。熱気で湧く山道に、車が続々と到着した。世間慣れしていない小程村の人々たちはどよめき、楽器隊は緊張のあまりリズムを崩し、秧歌隊もわれを忘れて隊列を乱した。

客人たちが手を振りながら村に足を踏み入ると、待ち切れない村人たちが両手いっぱいの棗を抱えて「食べる、食べる」と通せんぼ。それを見た同行の役人が叫ぶ。「みなさん、今回はもっぱらあなたたちの棗をいただきに伺ったので、焦る必要はありません！」村人たちがようやく落ち着きを取り戻すと、「民間芸術村」村長の程文が号令をかけた「みんな慌てずに配った名簿にしたがって、自分の家に決められた客人を迎えるように。」こうして、客人はようやく宿泊先の家におさまった。

程瑞の家の女房、花華は家で火を焚いて客人を待っていた。夫が客人を連れてもどるや否や驚き立ちあがって、黄河沿いの方言で言った。「ここ数日は待ち過ぎで死にそうだったよ。アイヤー！こんなすごいお客、どうやってここまで来なされた？」

スイスの駐中大使が礼儀正しく「“黒唠”(Hello!)」と話しかけた。こわばって「まだ空は暗くないよ。今、朝食を準備してるところだよ」と言う花華。「挨拶だ。ニーハオという意味だよ」と慌てて説明する通訳。「アイヤー、驚いたじゃないか！」夫の程瑞に「わしらは聞いても分からずやたらに話したら笑われるって、言っておいただろ」と釘を刺され、花華ははすかしそうに顔を赤らめた。スイス大使先生は彼らの会話を察すると腹を抱えて笑って一言、「ノープロブレム！」程瑞夫婦はつられて笑いながらも、通訳をみつめ助けを求めた。「大丈夫だって。」通訳がつかさず説明すると、その場にいた皆に笑みがこぼれた。

外国からの客人たちはオンドルの上に坐るのが苦手だと予め聞いていた彼らは、窑洞の奥にテーブルを用意し、そこに正月料理をならべておいた。花華はスイス大使になみなみと米酒を注いだ。

大使先生は笑ってまた「“黒唠”(Hello!)」と言った。



碾畔博物館の展示品の浮袋を実演してくれた馬おばさん



電気が通った今、歴代の照明器具は博物館の展示室に

花華は今回は動揺せずこう言った。「米酒だけは、何が何でもあなた様に召し上がってもらわねばなりません。」大使先生が慣れない中国語で「謝謝」と答えると、室内は大爆笑に包まれた。

この日、小程村には剪纸、刺繍、布堆画(パッチワーク画)、布の玩具、絞り染め、藁細工、布靴などさまざまなものや並べられ、遠くから来た客人たちの目を楽しませた。特に「乾坤湾」と題された花華の剪纸は、黄河沿いで棗を収穫する人々、その傍らで靳先生が黄河の風景画を描き、女たちが民間芸術活動室で剪纸をし、中庭で秧歌隊が練習に励むといったこの村の光景をダイナミックに描き出し、客人たちの評判を呼んだ――。

### ✂️ 「小程民間芸術村」、後日談

エッセイ「小程村から出発して」はこの後、靳之林氏がある古窑洞で1200年前と推定される古い石彫を発見するエピソードなどが綴られますが、私からの紹介はここまでにしめよう。

文章は最後に次のような力強いメッセージで締めくくられます。「民間芸術は人々の生活から切り離されたとたんに、生き活きた生命力を失ってしまう。それはまるで深い眠りについた古代の岩画のようなものだ。民間芸術は人々が喜びをもって作り出す時に、民衆に

よって応用されることで、自然と発展していくものだ。」

馮さんと靳先生の小程村での活動はその後、隣接する碾畔村の空き窑洞を生かして黄河流域の生活文化博物館(エコ・ミュージアム)を村人主体で設立するプロジェクト、さらに2004年には延川県全県の村の剪紙大調査など、壮大な計画へと発展していきました。小程村からは数人の著名な剪紙作家が出て、今は県城に居を移して活動を続けています。電気が通った小程村は今では舗装道路も整備され、村の麓には窑洞をかたどった休暇村も出来て観光地化し、村の幾つかの家は農業の傍ら、「農家楽」として観光客を迎え入れています。

ところが馮氏は後に、自らが作った小程民間芸術村や碾畔村の博物館の活動を振り返り、反省もあると語っています。

電気を通す、という悲願のために邁進した村人たちの「民間芸術」熱は長くは続かず、ボランティアに近い

村営博物館の維持管理は年々難しくなっており、また「民間芸術」で稼げる家とそうでない家との間に以前にはなかった経済格差が生れ、村人たちの関係そのものが変化してしまったと言うのです。

「次に博物館を作るチャンスがあれば、住民が新しい村に移住したことで村ごと捨てられ、忘れ去られたように残されている古い窑洞群を手を加えずに、そう、碾畔村のように展示室として整備したりせず、そのままの姿で保存するような、そんなやり方を選ぶだろう。」そう話す馮さんの複雑な表情は、多くの問題を投げかけるものとして、深く私の印象に残っています。

★丹羽朋子(にわともこ)—————  
中国の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」を運営。本エッセーのバックナンバーは一芯社のサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)に掲載中です。

## 読む(82)

## この国のかたち

司馬遼太郎著  
文春文庫

82回を迎える拙欄ですが、気が付けばタイトルが2文字になっていて、思わず笑ってしまった。いや、笑ってはいけない。「中国を読む」でスタートしたのに、私がすっかりふらふらして、結局、テーマがなくなってしまう。本当にすみません。

拙欄で、一番登場回数の多い司馬遼太郎は、大学の受験対策で読み始めた。日本史まで手が回らなかったのだ。小説を読んで誤魔化そうとしたのだ。結局、日本史は苦手教科のままだったけれど、教科書では数行で終わってしまう事実のなかに、膨大な物語があること、また、時代を接いで小説を読んでいくと、歴史は季節のように連続性を持って、しかし確実に移ろっていくことが分かってきた。(そして、きっと「繰り返す」のだろう)。

この本でも、「たとえば、兼好法師や宗祇が生きた時代とこんにちは、十分な日本史的な連続性がある。また、芭蕉や荻生徂徠が生きた江戸中期とこんにちは文化意識の点でつなぐことができる」とある。ただ、「昭和ヒトケタから同二十年の敗戦までの十数年は」、「日本史のいかなる時代ともちがう」と、氏は言い切る。

氏によれば、当時の日本は、織田信長が活躍した時代の武器を持って、アメリカと戦争をしたようなもので、そのおろかな二十年間は「異胎の時代」だった。その出発点は、さらに二十年ほど遡る。そこには、日露戦争でボロボロになった日本が、ぎりぎりの条件で結

んだ講和条約に満足しなかった大群衆がいる。「講和条約を破棄せよ、戦争を継続せよ」という民衆の叫びこそが、出発点だった。

さて、その時代を経て66年。この本は1990年に単行本が発行されているが、すでに氏は、当時の社会について、「平面的な統一性」「文化の均一性」「ひとびとが共有する価値意識の単純化」を指摘し、「価値の多様状況こそ独創性のある思考や社会の活性を生むと思われるのに、逆の均一性の方向にのみ走りつ

づけているというばかばかしさ。これが、戦後社会が到達した光景というなら、日本はやがて衰弱するのではないかと警告を鳴らす。

ちなみに1990年とは、バブルが崩壊した年。それからさらに20年が経った。

(真中智子)



文春文庫

紙上展覧会  
日本の浮世絵に影響を与えた中国の彩色版画

中国年画展 II

埼玉県山西省友好記念館「神怡館」  
解説 神林直樹

今回は神仏の年画を中心に紹介しましたが、今回は隠喩を含む年画を紹介します。

剪紙など他の中国民間芸術と同じく、年画でも隠喩法を使った図案は多く見られます。隠喩法というのは「蝙蝠」や「鯉」を描くことにより、発音の似ている「変福」や「利」を連想させるといった技法です。

このような隠喩を知ることによって、絵の奥にある人々の想いを感じ、更に深く鑑賞できるのではないかと思います。

★鹿鶴同春(山東省／楊家埠年画)

発音の似ている鹿と六、鶴と合を組み合わせた「六合」という言葉は東西南北に天地を加えたものを指し、全世界・宇宙のこと。世界が春と同じように穏やかであれという祈りが込められています。



★喜報三元(山東省／楊家埠年画)

通常は官吏になりたいという図案が多いのですが、こちらはすでに官吏になっている人用で、自分の官職が子孫まで続くようにと願う図案です。

船のおもちゃの上に乗っている冠と帯は、官吏の象徴。

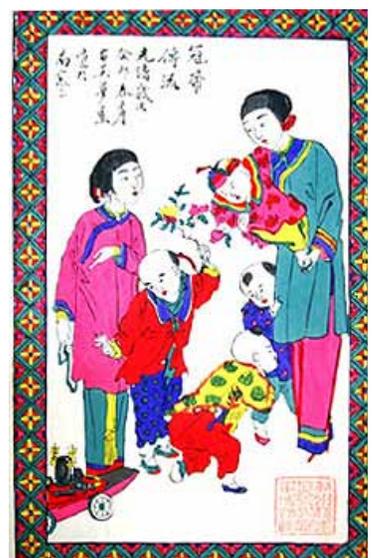
伝流とは代々受け継いでいくという意味で、同じ発音のため船が伝、榴が流を暗示しています。榴とは、子供が持っている石榴のことです。



★冠帯伝流(江蘇省／桃花塢年画)

通常は官吏になりたいという図案が多いのですが、こちらはすでに官吏になっている人用で、自分の官職が子孫まで続くようにと願う図案です。

船のおもちゃの上に乗っている冠と帯は、官吏の象徴。伝流とは代々受け継いでいくという意味で、同じ発音のため船が伝、榴が流を暗示しています。榴とは、子供が持っている石榴のことです。



★肥豚拱門(河北省／武強年画)

豚は子たくさんで繁栄の象徴。その豚が門から入ってくるという図案です。富を象徴する金魚もいます。

この図案には「喜鵲登梅」という意味もあり、喜びを告げる鳥・鵲と梅が描かれています。梅と眉が中国語で同じ発音のため、喜びが告げられ鵲が止まると眉(梅の枝)が下がる、つまり笑顔になるという意味を持つのです。



★麒麟送子(河北省／武強年画)

伝説上の動物麒麟に、子供が乗っている図案です。

麒麟は仁徳の世に出現するといわれ、聖人が良い政治を行う前触れとされます。麒麟に乗ってくる我が子が、将来立派な人になってくれるように、との願いを込め家の中に飾ります。





★ 富貴

(江蘇省／桃花塢年画)

多くの財産(富)と高い地位(貴)を願う図案です。

発音が似ていることから福をもたらす蝙蝠を子供が掴んでおり、貴と発音の同じ桂花(キンモクセイ)が下に描かれています。

★ 連有余利(天津市／楊柳青年画)



財産が余るほどたくさんありますように、との願いが込められています。

発音が同じだったり似ていたりすることから、蓮が連、魚が余、鯉が利を暗示しています。

★ 獅童進門(江蘇省／桃花塢年画)



想像上の動物・獅子に乗った子供の図案です。

獅と同じ発音の獅子が親子でいる図案は、古代中国の高級官職・大師小師を暗示し、子供の出世を願っています。

★ 連生貴子(天津市／楊柳青年画)



子供が生まれるよう、子孫繁栄の願いが込められています。発音が同じことから、蓮が連、笙(楽器)が生を暗示しています。



★ 大吉(山西省／臨汾年画)

鶏と吉は発音が似ているため、鶏は吉祥鳥とされます。

子供が乗れるくらい大きな鶏は大吉を暗示し、非常に縁起の良い図案です。

★ 三羊開泰(天津市／楊柳青年画)



羊は陽と発音が同じで、易经では陽が3つで乾(☰)となり、「動機が正しく、その正しさが持続するならば希望が通る」というような意味になります。

★ 四季平安(山西省／臨汾年画)

鶏と一緒に四季を象徴する花、牡丹(春)・蓮(夏)・菊(秋)・梅(冬)を組み合わせ、1年中平和であるよう願います。



★ 蝴蝶恋花(山西省 臨汾年画)

花の蜜を吸う蝶の図案です。花を女性、蝶を男性に見立てており、新婚夫婦の部屋によく飾られます。



**中国年画展** 10月15日(土)～12月25日(日)  
～日本の浮世絵に影響を与えた中国色彩版画～  
\*山西・山東・河北・天津・四川などの年画約300点

- 会場：埼玉県山西省友好記念館・神怡館  
(埼玉県秩父郡小鹿野町両神薄2245)
- 問合せ：☎ 0494-79-1493 (開館：9:00～17:00)  
◆ 休館日：火曜日、  
祝日の翌々日、  
年末年始(12/29～1/1)
- 入館料：350円(65歳以上の方は無料)

◆ <http://www18.ocn.ne.jp/~ogano/shenyi.html>  
(キーワード：しんいかん)

主催：(財)小鹿野町振興公社  
協力：麗澤大学 金丸良子教授  
日中文化交流市民サークル'わんりい'岩田温子

2010年4月下旬、約15名のツアーは上海虹橋空港から春秋航空8871便に乗り、2時間後、湖南省の張家界空港に降り立った。

春秋航空といえば最近茨城空港に乗り入れた格安航空会社として日本でも有名になったが、私は大連に住んでいた時、機会があればこの春秋航空を利用した。上海に本社を置く中国初の民営格安航空会社である。利用する理由は3つある。1つは会社名。春秋と言う言葉は勿論、春と秋の季節を表わすが、中国の昔の時代の名称であり、史記の「春秋に富む」など歴史書によく使われる言葉で深みが有りとても好きなのである。会社設立は2004年5月である。何でもネーミングは大切である。

2つ目は航空運賃が安いことである。中国の諺に「1分銭、1分貨」という諺があるが、諺通りに、搭乗するとミネラルウォーターをペットボトルごと1本だけくれるのである。座席も少々窮屈だが2～3時間の距離はこれで充分である。

3つ目はスチュワーデス(今はなぜかフライトアテンダントと言うようだが)が首に巻いている緑と黄と二色のネックチーフがとても上品で好きなのである。これを巻くとどのスチュワーデスも美人に見える程である。機内で販売しているので乗った時は日本への土産として購入した。だいぶ横道にそれだが春秋航空についていつか書いておきたいと思っていたのでお許しいただきたい。

さて今回は張家界市と鳳凰という美しい名前の町の二ヶ所の旅行記であるが、旅の日程に沿って鳳凰古城からはじめることにする。その前に湖南省全体を見てみたい。私は湖南省といえばこれまで洞庭湖と数々の漢詩に謳われた岳陽楼しか知らず一度も行ったことがなかった。折角今回チャンスを与えられたのでいろんな知識を仕入れた。少し誌面を割かせていただきたい。

湖南の「湖」であるが、先述した洞庭湖という中国で三番目に大きな湖(2432km<sup>2</sup>もあって琵琶湖の3.6倍の広さがある)をいい、その南にあるのでこの名がついた。省内の一番大きな河川は「湘江」で、そこから湖南省の略称は「湘」となっている。この湘江流域には芙蓉(荷花)がたくさん植えられているようで、唐詩の中にも「秋風万里芙蓉国」と謳われ、また毛沢東の詩にある「芙蓉国尽朝暉」(朝暉は朝の日差しのこと)という句が良く知られているらしい。そうしたことから同省は別名を「芙蓉国」というそうだ。いかにも美しい情景が目に浮んで来そうである。どうりで空港の名称は「張家界荷花機場」となっていた。建物の外観も芙蓉の花が咲いているような形であった。

省都は「長沙市」だがあまりなじみのない都市で私も知らなかった。「沙」は砂のことだが湖南地方は中国有数の穀倉地帯であるから長い砂丘などないであろうに。あまりじっくりこない名前といえば叱られそうだが。

湖南省といえば、建国時に多くの人物を排出している。まず毛沢東そして胡耀邦、華国峰、劉少奇等々。栄光の省とでもいえようか。ちょうど明治維新の薩摩藩と長州藩のようなものだ。また中国国内を旅行すればよく話に聞いたり、銅像も立っている雷鋒も湖南の人だ。共産主義戦士として1962年に22才の若さで国家のために殉じた人で、子供でも知っている。共産党の精神的な柱となっているようだ。それではそろそろ本題に戻るとしよう。

## 1. 鳳凰古城

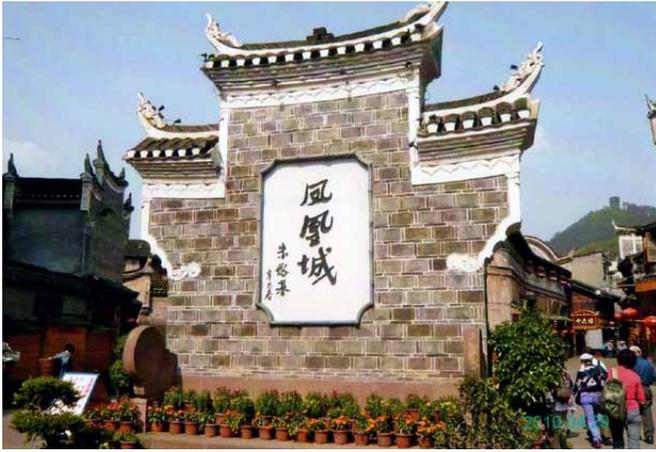
張家界に到着した翌朝、ホテル前からバスに乗り、鳳凰をめざした。南西方向に約300km走るといふ。鳳凰という町は勿論聞いたこともないが、「中国で一番綺麗な古城(町)」と言うのだ。私の厚いガイドブックを調べたが出ていない。想像をふくらませてもイメージがわからない。

バスが走り出してすぐ左手に迫力のある岩山が目に入り飛び込んで来た。拳骨を巨大にしたような山容で、高さは1517mと結構高くそびえ、周囲に高い山がないのでとても印象的である。皆その山を眺めていると女性のガイドの李さんが、「左の山は天門山といいます。とても素晴らしい山で1300mくらいの所に天門洞という大きな空洞があります。小型の飛行機が通りぬけられるほど大きいものです。鳳凰は半日あれば充分なので、明日、天門山観光を取り入れるべきです」と強く主張し始めたのである。

あまりにしつこく言うのでツアーの団長がどうしたものかとオロオロする始末。結局予定を途中で変更すべきでないという正論が採用され、車窓から眺めるだけになった。彼女にとってはそこも案内するとバックマージンが増えるからであろう。ところで李白に「望天門山」という詩があるが、これは安徽省の長江沿いにある山で別である。安徽省の天門山は見たことはないが、この張家界の天門山の方が素晴らしいのではないかと思う。

バスは舗装された道であるのだが常にガタゴト揺れながら走っている。舗装が良くないのか、バスのスプリングが悪いのかどうか分からないが、中国の地方の一般道は概して快適ではない。

3時間余り走り吉首という街に入る。そろそろ着くの



鳳凰古城の入口



銀製品などを売っているホテル近くの露店

かなと思っていると、ここで昼食をとってまだ1時間半も走るといふ。上り坂や下り坂が延々と続き、天門山が見えなくなると印象に残る景色も殆どなく、こんな山奥に果して「中国で一番綺麗な古城があるのか」と心配になってくる。結局午後2時半に鳳凰古城の入口近くに着いた。そこからほどなく「江天旅遊度假村」ホテルに着く。3階建てで屋根瓦がのっている。ところどころに卯建の白壁で仕切られているホテルで周囲の環境によく適合している。道路の両側もいかにも中国らしい建物の商店が軒を並べ、地面に土産物や果物を置いて売っている人もあり、とても活気がある。チェックインしたあと夕方まで自由行動となった。

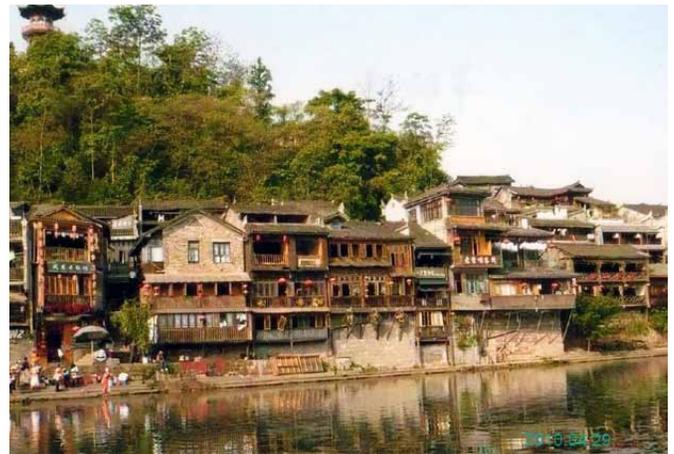
鳳凰古城の入口であり象徴でもある「虹橋」がホテルのすぐ近くにあり皆まずこの橋を写真におさめる。この橋の外観はといえば、立派な屋根がついており、その両端はピンと反った独特の形をしている。虹橋と名がついているが、虹のような色でなく橋全体が紺色とグレーを交ぜ合わせたような深みのある色で覆われ、午後の日差しに映えて美しさを増している。橋の通路の両側には商店がズラリと並んでいる。橋の形だけでもめずらしいのに、橋の中にはお店がたくさんあるなんて、何となく嬉しくなるではないか。

見ると近くに銀山でもあるのか銀製品の店が多く、また水牛の角で作った製品の店も多い。女性の参加者は、目が輝きを増し、早速品物を手にとり、首や手首につけたりしている。これまでいろいろな橋を見てきたが、屋根つきの橋は見たことがなく、この橋を見ただけでも山道を4～5時間もかけて来た甲斐があったと思った。以前ジェームズ・ウォラーの「マディソン郡の橋」という本を読んだが、本の中の写真を見ると屋根つきの橋であった。アイオワ州にあるらしいが雨の多いところなのであろうか。

橋を通り抜け、右手に石段を下りると川沿いに城壁のように続く建造物がある。上にのぼると景色がとてもよい。そこから川の両側の建物を見る。多くは旅館と土産



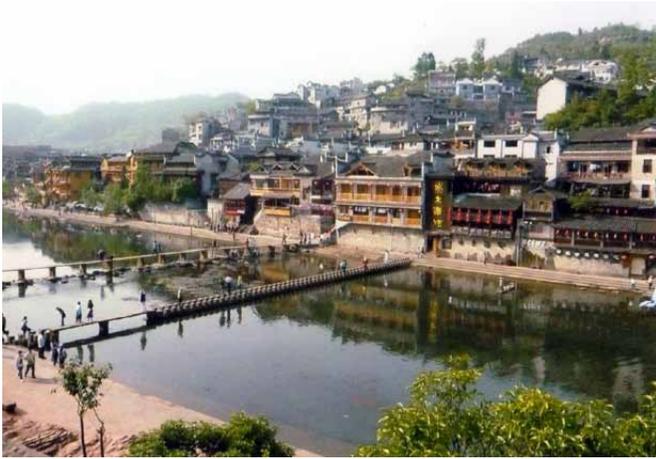
屋根つきの橋で知られた虹橋



吊脚樓の景観

物店である。これらの建物は「吊脚樓」と言って丸太を川に斜めに突き出し、建物の面積の半分近くが川の上にせり出すように建てられていて独特の景観を見せている。これもこの古城の名物だとガイドが教えてくれる。何のためにいつ頃からできたのであろうか。大雨が続き鉄砲水のように川が増水すれば、ひとたまりもないと思うが、それも杞憂なのであろうか。

そこから作家の「沈從文故居」に向う。彼が書いた「湘行書簡」がこの古城を一躍有名にしたという。1934年初頭、彼は湖南省の北部にある常德市から舟に乗り故郷の鳳凰に帰る旅をした。旅の途中で見聞したものを家で



沱江と跳岩の遠望

待っている新妻に手紙で書き送り続けたという。のちにこの手紙をもとに本にまとめたのが「湘行書簡」である。私も土産物店でこの本を購入して本箱に飾ってある。彼の住居は今では観光名所となっているが、この他にも「楊家祠堂」、「熊希齡故居」、「古城博物館」は一見の価値がある。「天后宮」「天王廟」「万寿宮」など由緒ある寺院も多い。小さな町だが、歴史がいっぱい詰まっている。また、この町の路地は殆ど石畳となっていて、町の雰囲気づくりに役立っている。中国の小京都といった風情である。

さて虹橋の下を流れる川だが、町を二分するように中心を流れている。沱江(トゥオジャン)という川だ。川幅は広いところで70～80mはあるか。ゆったりとした流れの中に飛び石状に「跳岩」と呼ばれる石が設置されており対岸まで行けるようになっている。渡ってみたが岩のまわりの水流は速く少しこわい思いをした。跳岩の少し下流に船着場があり20人乗りくらいの船がつないである。2グループに分かれ乗船した。兩岸の吊脚楼や遠くの山々を見ながら船は虹橋の下をくぐってゆく。そのうち川岸に一艘の船が見え、触先にカラフルな民族衣装を着た若い女性が立っている。ガイドが少数民族の苗族の女性のようにと言っていた。そして「近づいた時全員で拍手すると歌を歌ってくれます」と言うので皆拍手した。果して綺麗な高い声が山々にこだまするように聞こえてきた。最後に「ヨーホイ」と締めくくった。ガイドが「これは歌を返してください」という意味だと言うのでツアーの中の歌の上手な人が歌いはじめた。何という優雅な舟遊びであろう。そうこうするうちに「万寿宮」というお寺の下の船着場に到着し下船した。皆しばらく幸せな余韻にひたっていた。

午後の時間はあっという間に終り、買物やまだ観光できなかった場所は翌日とし、ホテルに戻り夕食をとった。夕食後夜景がとても美しいとのことなので皆また外出し川沿いの道を歩く。遠くの橋も近くの橋も吊脚楼もライトアップされ、真黒な川面にそれらが映し出される様

子はまるで夢の中にいるようだ。この古城を人々は「夢里的故郷」と言うガイドブックにある。

ここまで書けば「中国で一番綺麗な古城」といわれるのを納得されたであろうか。ただ美しいというのではなく、シンボルの虹橋、川に突き出ている吊脚楼の奇観、防火と美を融合した卯建の数々など他所で殆ど見られない建造物。歴史と石畳に包まれた古城。優雅な川下りと少数民族とのハーモニー。これらにより最大限の形容詞は、この古城にふさわしいのではないか。ガイドが世界遺産を目ざしていると言っていたが、何れの日か実現するかも知れないと思った。

翌日は、改めてゆったり観光し昼食後古城を後にした。もう二度と来られないのではと一抹の寂しさを覚えた。来た道に戻っているのだが車窓の風景も違って見える。ちょうど田植の時期であちこちで稲を植えている。一昔前の日本の農村風景のようななつかしさを感じる。帰り道でうれしかったのは、「芙蓉鎮」という町を通ったことだ。私はこの映画はまだ見ていないが、「ここでロケしたんだ」と思い、いつの日か必ずこの映画を見てみよう、風景を目に焼きつけた。映画を製作する前は王村鎮という名だったそうだが、この映画により村の名を改めたと説明があった。1987年の作品だそう。芙蓉国の芙蓉鎮。昨日のバスの中では早く到着しないかとばかり思っていたのに、帰りのバスでは全く違った気持ちになった自分がいた。

(次月号に続く)

‘わんりい’へ入会を歓迎します

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

入会されると

①年10回おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

問合せ：☎042-734-5100(事務局)

Eメール：wanli@jcom.home.ne.jp

今回はコロンボ中心部から約10kmほどの場所にあるデヒワラ動物園の話をしていきましょう。

パンフレットによれば、総面積は約17万m<sup>2</sup>ありアジアで最大規模とされています。ここにはスリランカに生息する86種の哺乳類、427種の鳥類、無数の爬虫類のほとんどが集められているだけでなく、スリランカ固有の動物と交換で集められた世界各国の動物を含めて2000種以上の動物が飼育・展示されているそうです。

上野動物園でも500種と言いますからデヒワラ動物園での種類の多さが判ります。よく言えば、あるがままの自然を生かして動物達をのびのびと飼育・展示しているのですが、広大な敷地をまだまだ活かし切っていないようです。動物園が大好きな僕としてはもう少し何とかならないかと感じます。これまでの赴任地だったマレーシアのクアラルンプールやシンガポールの動物園に比べるとやや見劣りがしますが、ここは伸びしろが沢山あって将来が楽しみと考える事にしましょうか。

平日も、主として遠足に来ている小・中学生たちで結構混雑していますが、しかし、土・日曜日や休日ともなると恐ろしい程の混雑になります。海外からの観光客の姿は少なく、ほとんどがスリランカ人の家族連れや友人グループ、恋人同士のカップルです。

コロンボ周辺には家族連れ等で出かける事の出来る娯楽施設は此処しかありません。博物館や美術館もあり外国人観光客には人気がありますが、スリランカ人にはあまり人気がないようです。コロンボ中心地にあるバスターミナルや鉄道のデヒワラ駅からバスでやって来る人、バス停から歩いて来る人達をクラクションを鳴らし続けて掻き分けながら三輪タクシーでやって来る人、運転手付きの自家用車でやって来る人などで年末の上野のアメ横のような雰囲気です。開園時間の8時30分には入場券売り場には長蛇の列ができ窓口に辿り着くだけでも大変な騒ぎです。

園内に入って各種動物の檻や水族館を一通り見終わると、この動物園の最大の呼び物である午後4時30分から始まる「象のショー」を良い席で見するために、場所取り合戦がはじまります。2～3時間も前から観客が集まり開演の時間を待ちます。日本だと辛抱強く待つという表現になるかと思いますが、スリランカでは直径20mぐらいの円形のステージを囲んで、遅めの昼食を食べたり、食後の午睡をしたり、お喋りを楽しんだりしながら、待つ事自体を楽しんでいる様に見受けられます。

子供達も大人達もワクワクしながら開演時間を待っています。僕を動物園に連れて来てくれた事務所のスタッフは何度も来た事があるそうで、待っている間にショーの開始から終了までを事細かに説明してくれました。なんともお節介な説明ですが、これがスリランカ流のホスピタリティー(おもてなし)なんではないかな。

待つ事暫し、開演の時間です。人間が手をつなぐように、最初の象のシッポを2頭目の象の鼻が掴み、2頭目のシッポを3頭目の鼻が掴むといった具合に5～6頭の象が手ならぬシッポと鼻をつないでの入場行進です。そのままの隊形で、最後尾の象のシッポを先頭の象が鼻で掴み、円形のステージを結構な速さでクルクル廻ってショーの開始です。

正確な順番は忘れてしまいましたが、小さな台に身を竦めるようにして乗ったり、片足立ちをしたり、地面に寝ている象使いを踏むマネをしたり、口でくわえるマネをしたり、楽器の演奏をしたりと事前に聞いていた芸を披露してくれました。事前に聞いていたにしても、まさしく聞くと見るのは大違いです。象達のユーモラスな芸に大笑いでした。

しかし、もっと面白かったのは象の芸を見ているスリランカ人観客の反応です。象の入場行進が始まっただけで大興奮です。地面に寝ている象使いを踏んだり口でくわえるマネをする時には、何でそんなに真剣になれるのかと思うほど、観客皆が固唾を飲み、目を見張って食い入るように見つめています。芸が終わり、象使いが立ち上がって怪我をしなかったとばかりに手を振ると、皆が緊張をほどいて拍手喝采とともに安堵の表情を浮かべていました。象達が楽器を出鱈目にズンチャカズンチャカするだけでも大笑いです。よおく周囲の観客を見てみると子供達よりも大人、特に男性客の方が真剣に見て、興奮していました。象使いが踏まれそうになる時には正視できない様子で目を手で覆っている男性もいました。僕は檻の中の動物や象のショーを見るのも楽しかったけれど、スリランカ人を観察する方が面白かったです。きっと、檻のなかの動物達もスリランカ人のオジサン達や変な日本人を観察していたに違いありません。

象のショーが終わると動物園も閉園時間になり、皆が一斉に家路に着くので朝と同じ混雑と喧噪に突入します。外に出ると三輪タクシーの運転手達が客を呼び込む賑やかな叫び声が響き、バス停に向う人達も今日の思い出話でもしているのでしょうか、興奮醒めやらぬ様子で声高に話をしていました。

## ポレポレ建築物語

アフリカンコネクション 竹田悦子

ポレポレ (pole pole) とは、スワヒリ語で「ゆっくり」の意味。この8年、私たち夫婦は、まさにポレポレで、ケニアで土地を購入し、家を建てた。ずっと昔に、“I had a farm” (訳：私は農場を持っていた) という書き出しで始まるアイザック(カレン)・ブリクセンの自伝「アフリカの日々」(\*参照)の本を読んで、外国人女性として1人でケニアの地で生きた姿に感動した。いつしか、私もアフリカで農場を持つ夢が叶ったことになる。

2002年にケニアを去って、日本に帰国してから8年の間、まず1ヘクタールの農場を手に入れたのが最初で、その後少しずつ土地を買い広げていった。そして最終的に5ヘクタールの広さとなった。

それにしても購入、契約、建築など、すべてがゆっくりだった。ケニアでは土地の所有は、すべて植民地時代のイギリスの方式を採用しており、正式な Title Deed (土地譲渡証書) を新旧所有者間で、弁護士を通じて契約書を交わすシステムになっている。この一連の手続きにも時間がかかった。

銀行などの住宅ローンや一般的な融資のシステムが、利用者に浸透していないケニアで家を建てる一般的な方式は、お金が貯まったら少しずつ土地を買い、建築資材を



家を建てる基礎工事をする作業員たち

買い、人を雇い、建築を少しずつ出来る所から始めていくやり方だ。ケニアのいたるところに建築中の家や建物が長期間放置されているのも、自分たちの貯金に合わせて、すべて少しずつ建築していくためである。私たち夫婦も、まさにこのケニア式で1つ1つ積み上げて進めてきた。

首都のあるナイロビに家を持つか、或いは夫の実家近くがいいのではと悩んだ挙句、結局私が一目ぼれした場所に決めた。その場所はケニア滞在中、たまたま訪れた田舎町だが気に入った場所だった。そこは、標高3906mの中央ケニア州にあるキナゴップ村。一言で言うならば、何も無いところだ。北側には標高5111mのケニア山やアバディア国立公園があり、観光地として有名なロッジもその先には沢山ある。首都ナイロビからは、北上すること200km。車で2時間の距離にある。

初めて訪れたとき、不思議にただ懐かしさを感じた。キクユ族しかいないこの村は、典型的な農業を中心とし、主な産業もなく、ただただ自給自足のための農業が人々の手で行われているありふれた農村。購入した場所も、有史以来誰も耕したことの無いアフリカの大地。木が点在し、自然に自生している芝生と花。その時訪れた自分が、この何も無い村にこんなにも魅せられたのは何故だったのかは分からない。友人の家に滞在し、舗装されていないがたがた道を自転車で走ったり、畑で野菜を収穫したり、牛、ヤギ、ウサギや羊にえさをやり、ヤギのお乳を搾り、水を汲みに出かけ、薪を集めに畑に入る。そんな生活を2日したのち、心から寛いだ気持ちになった。静かに時が流れ、人の手が入らなければ何も変わらないであろう風景の中で、時間や予定に縛られないで生活をしている人々がここにはずっと昔からいる。世界の出来事だけでなく、ケニアの出来事からも切り離されたような日常を送る。



基礎工事の為に穴を掘る



家建築の基礎

さて、アイザック(カレン)・ブリクセンも、ナイロビを見下ろすンゴン丘陵というマサイ族の土地に農場を所有し、大規模コーヒー農園を経営していた。1914年、デンマークからイギリスの植民地であったケニアに渡った、夫と別れた後も1人でケニアの首都ナイロビ近くで18年間、経営した後に農園を閉めた。そして1931年に帰国、1933年にケニアの日々を綴った「アフリカの日々」を出版する。植民地時代の貴族的な暮らしぶり、白人入植者の思いを細かく美しく綴った。

現在もその時の住まいがそのままカレン・ブリクセン博物館として残っている。高台に立つ、平屋の大きな屋敷。1人になってもケニアに残り、植民地支配下にあるケニア人と共に農場を経営し、18年間もの間住み続けた彼女の人生の充実と苦悩の日々が染み付いた家。この博物館の庭で、結婚披露パーティーなどが開かれたりするほど美しい眺めだ。私も彼女の住まいであった博物館を訪ねてみた。

高価な調度品や木目の落ち着いた家具が並んだ彼女の家の、一番印象的な場所が、「窓」だった。彼女も眺めたであろう小さな窓から見えるケニアの青い広い空の美しさ。

実は、私達の家はまだ屋根がついておらず未完成だ。しかしそれが普通のケニアの建築の仕方なのだ。施主である夫も含めて、誰も気にしない。こうしてポレポレ建築物語は続くのである。

そしていつか私も完成した家に住んで、そこでの生活を振り返りながら、「I had a farm」で始まるアフリカでの日々を書いてみたいと思っている。

掲載写真：中央ケニア州、キナゴッブ村  
撮影：ガスパレイ・ミグィ・キルス

#### 【参照】

アイザック・ブリクセン著「アフリカの日々」(横山貞子訳晶文社1981年出版)

「I had a farm」(訳：私は農場を持っていた)の書き出しで始まるアフリカでの日々を綴った散文。アカデミー賞受賞映画「愛と悲しみの果て」の原作としても有名です。

## わんりい活動報告 第5回「漢詩の会」 2011年11月6日

於：まちだ中央公民館・音楽室Ⅱ

10月2日の第4回「漢詩の会」参加者の強い希望で急遽、開催を決めた第5回「漢詩の会」であった為、PR期間は短かったが、前回出席者の殆どが引き続き参加され、10名が植田先生の講義を傾聴した。

今回は、詩仙・李白と同時代を生き、詩仙に対する詩聖として並び称される杜甫を取上げた。資料としては、「春望」「絶句(遲日、江山麗しく)」「絶句(江碧にして)」「絶句(慢興)」の4編を用意した。

植田先生の講義は、杜甫の人となりや李白との友情、李白と杜甫の詩境の違い、「春望」が作られた頃の社会情勢等等興味深く、時間の経つのも忘れて伺った。また、漢詩の平仄ひょうそく注)に関する丁寧な説明があって、今まではややこしくて難しいものと敬遠していた平仄の面白みが、ほんの少しだけ判ったような気がした。

先生の感情豊かな朗読の後、一句ずつ発音の指導をいただきながら「春望」の朗読を試みた。直前に伺った講義から、安祿山の乱に際し、都・長安を脱出して皇帝の行在所に駆けつけようとして賊側に捕えられ軟禁された杜甫の無念、荒廃した都を目の当たりにした杜甫の嘆きと憤りを思いながら朗読すると、心なしか句が滑らかに口をついて出るように感じられた。

然しながら、3,4回練習したところで、終了時刻になってしまった。「春望」だけでも盛りだくさんの講義内容で、用意したほかの詩の説明もまだ伺っていないので、次回は今回の資料を使って、「春望」の朗読練習を含めてお話をお願いすることにする。

わんりいの「漢詩の会」は、中国語による漢詩朗読を聴き、漢詩の意味やその背景にある歴史的な話を伺うだけでなく、参加者自身が中国語の漢詩朗読が出来るように指導いただくことを目標に掲げている。

中国語の学習者にとって漢詩の朗読は、中国語の発音練習に最適であるが、中国語学習者でなくとも、中国語の朗読を詩吟の詠法の一つとして身に付けたら面白いのではないだろうか。是非お勧めしたい。

次回は来春2月、先生のご都合と会場の折り合ったところで開催する予定である。

(報告：有為楠君代)

#### ひょうそく平仄 (中国語 píngzè)

中国語における漢字音を、中古音の調類(声調による類別)にしたがって大きく二種類に分けたもの。漢詩で重視される発音上のルール。平は平声、仄は上声・去声・入声である。漢詩において、平声字と仄声字を交互に置くことによってリズムや音の調和を作り出している。

(ウィキペディア・フリー百科事典より)

福州での1年間はあっという間でした。福州滞在中に福建省内をあちこち旅行したいと思っていましたが、行きたいと思っていたところの半分は行けませんでした。廈門、泉州、永定土楼そしてこの近くのいくつかの小さな村等には行くことが出来ましたが、ぜひ行きたいと考えていた武夷山は行く機会に恵まれませんでした。とはいえ、教えていた学生たちと旅行したいという希望の方は、何人かの学生と実際に行くことが出来幸運でした。

福州郊外に鼓山という名勝地があり、ここには赴任早々10月に4人の学生と行きました。学生たちは何かと気を使い、何から何まで面倒をみてくれました。中国人学生は目上の者に(特に、教師に対しては)一目置くというか尊敬するというか、その思いが大変強いと感じました。

さらに国慶節の休みには、学生の一人張志雲君の故郷へ招かれて4日間ほど龍岩へ行く機会に恵まれました。彼の家族は両親と彼の3人ですが、広いマンションに住み、その上自家用車を持ち、普通の日本人よりもずっと豊かな生活ぶりを垣間見ることができました。このように中国では中間層の台頭が目立ちます。

父親の車で2日間永定土楼群へ案内していただきました。この土楼群はユネスコの世界遺産に登録されています。河南付近から移り住んだ客家の人々が外敵から身を守るために建てたと言われ、円形に建てられたものが多いので円楼等と言われたりもします。交通不便な山の中にあるので普通は訪れるのが難しいですが、車のおかげで何箇所も訪れることが出来ました。

私の仕事が最後の試験を終えての帰国寸前、日本語能力試験が中国で一斉にあり、学生たちは廈門に受けに行くことになっていました。福建省では廈門だけでしか受験できません。学生の一人羅健君が私と一緒に廈門へ行き、その後郷里の長汀へ旅行しましょうと提案してきました。

ぜひと考え、彼に廈門までの新幹線の切符の手配を頼みました。この新幹線は上海から廈門まで通じていて、2010年に開通したばかりです。乗るのが楽しみでした。廈門では別々のホテルに泊まり、彼の試験が終わり次第合流することになり、彼からの連絡を待っていると、とんでもない連絡が入り、財布を盗まれたというのです。お金がなくなったので一緒に旅行出来なくなったといいま



一緒に鼓山へ出かけた日本語科の学生たち



永定土楼群の世界遺産に指定されている福興樓

す。彼は福州に戻らざるを得なくなりました。残念ですが、私は3泊4日の予定で長汀へ一人で行くことにしました。長汀には廈門からバスで3時間位かかります。一人で行けるかと心配でしたが、なんとかバスに乗り、無事行くことが出来ました。

長汀は客家の人々が多く住む都市です。羅君自身も客家出身です。彼のお姉さんは5年間東京で勉強したことがあり、そのため日本語が堪能で、現在福州市内で客家料理の店を出しています。長汀まで来ると、隣はもう広東省です。ここは中国共産党が長征をスタートさせた所として歴史的に名高いところだそうです。市内にいくつかそれに関連した革命聖地が保存されていることを初めて知り、興味を覚え、いくつかを訪ねて回りました。

大学を去る1週間ほど前に日本語科の学生たちが大きな送別会を開いてくれました。夜7時からホールを貸し

切って100人位の学生が集まり、学年、クラスごとに寸劇やら歌やらを披露して、送別の宴としてくれました。先生方も出席してくださり、忘れられない時となりました。普段はいつもばらばらで纏まらない学生たちもこのような場になると協力して、うまく成し遂げることが出来るのですね。

こんな風にして私の福州での生活も終わりを迎えました。楽しいこともつらいことも、またいやなことたくさんありました。でもまわりの方々の援助や協力があったからこそ無事に終え、福州での生活もつつがなく過ごすことが出来たと思います。最後に、謝謝！ 学生和大家!!



帰国寸前に最後の夕食を共にした学生たち

【町田国際交流センター・トークプラザ(2011年11月13日/日 於:町田中央図書館6Fホール)より】

## 中国と日本の似ているところと違うところ

王 天陸 (国士舘大学・21世紀学部3年在籍)

中国と日本は海を隔てて隣接している国です。そのため、中国から日本に伝わったものは多く、今でもそれが残っています。例えば、お茶や、箸を使うこと、漢字などは、日本人の生活に定着しています。

中国も、日本も食事のあとに、お茶を飲む習慣があります。みんなでお茶を飲みながら、団欒したりします。また、お茶を飲むと、ほっとすることができます。

お箸も昔中国から日本に伝わったものです。中国でも、日本でも、食事の時に箸を使うことになっています。そんなに細くて長いものを使うまい、食事をするには、欧米人にとって、何だか不思議な感じがすると思います。

また、漢字も中国だけのものでしたが、唐の時代に、日本の学者が中国を訪ね、そして、中国の当時の漢字を習い、今の日本の漢字を作りました。例えば、日本語の中に「理由」という単語がありますが、その単語の中国語の発音は「li you」であり、非常に似ています。また、意味も同じです。

しかし、時間を経て、万物が変わってしまうということもあります。もう一度、日本語の例を見てみましょう。日本語の「手紙」という言葉

は、中国語では「shou zhi」と発音し、意味もだいぶ変わります。中国では、「手紙」は「トイレトペーパー」の意味になってしまいます。

言葉だけではなく、様々な方面にも違いがあります。同じお箸を使っている、食事のマナーには違う所があります。日本では一つのものを二つの箸でつかむことはタブーとされていますが、中国では問題ありません。また、中国では、ご馳走になる時に、食べ物を全部食べてしまうことは、食べ物が足りなかったという意味になり、あまりいいことではありません。なので食べきれない場合には、そのまま残すことが普通です。しかし、同じ状況で、日本では、食べ物を残すことは大変失礼なことになってしまうかもしれません。

また、同じお茶を飲む習慣ですが、中国ではお茶を飲むだけですが、日本人はお茶の文化を広げ、茶道を形成しました。茶道は世界で日本だけの文化になりました。

中国と日本は似ているところも、違うところもありますが、今、お互いを理解することが求められています。お互いの長所を学び、自分を改善することがさらに必要だと思えます。

大草原の真ん中に突然現れるチベット版西部劇の町、塔公。この旅の間中、ずっと再訪を楽しみにしていた土地に到着した私は、弾む気持ちでバスを降りると、スキップでもしたい気分を通りを歩き出したが、直ぐに、あれえ・・・？ と肩透かしをくらったような気持ちに包まればじめた。町の様子はどうも思い描いていたものとは違っているようなのだ。

ほんの一月前に訪れたあの日、真夏の陽射しの下、天空のカウボーイ達の憩いの場として活気に満ち溢れていた町が目抜き通りは、白い昼間の光に照らされガランとしているばかりだった。町を横切る人影も少ない白けた空気の中、到着早々に感じ始めている期待が外れた違和感に、どう自分の気持ちに折り合いをつけたいのか戸惑いながら、とりあえずいつものように、この町での落ち着き場所を探す事にした。

知らない町での宿探しは「招待所」の看板を掲げている建物を適当に物色し、部屋を見せて貰って料金と部屋の設備に納得したらそこに決めるのが常だが、宿探しの為に歩き回るのが面倒な私はさほど設備にはこだわらず、大抵1軒目の宿に落ち着いてしまう事が多い。なのに、何故かこの日に限ってそれすらもスムーズには進まなかった。訪れた宿が留守だったり、部屋の日当たりが悪く湿っぽい雰囲気が入らなかつたりと、なかなか落ち着き場所が決まらない。

塔公の表通りは端から端まで歩いて数百メートル位のものだ。人通りも少ない道で何度も同じ場所を行ったりきたりしているうちに、どんどん気持ちが沈んでくる。この町を訪れたのは間違いだったの？ あの日に見た活気に溢れていた塔公は幻だったのだろうか？

一つだけ思い当たる事といえば、町の活気に変化があるのは季節の関係ではないかと思われた。

このカム地方の高原では毎年夏になると、長年馬を駆り生活してきた遊牧民達の400年もの伝統に基づいた、盛大な競馬祭が草原のあちこちで催されるのだそうだ。晴れの舞台で華やかな民族衣装を身に纏った腕自慢の男達が、勇壮で華麗な乗馬の技術を競い合い、民族舞踊が舞われ、歌や芝居が披露され、彼らの文化に基づいた様々な競技が繰広げられる盛大なお祭りが一週間から10日程も続くのだという。普段は家族単位で大草原に散り散りに暮らしている遊牧民達も、この時期になると一斉に祭りが行われる土地に集まってく

るため、競馬祭が行われる草原の周辺には、その時だけ遊牧民達の巨大なテント村が現れるのだそうだ。きっとそんな祭りの場が若い男女の出会いのチャンスともなるのだろう。私が写真でしか見たことのない、祭りの日の遊牧民男女は、誰もがこの日とばかりに気合の入ったお洒落を決めて、頭の先からつま先までそれはそれは豪華絢爛だった。

そんな夏の競馬祭は理塘で行われるものが最も規模が大きく有名だが、塔公も競馬祭が行われる土地なのだそうだ。きっと私が前回に訪れた頃は、競馬祭に集まった遊牧民達がまだ町の周辺に居残っており、祭りの余韻で町が沸き立っていた時期だったのではないだろうか。

そう思えば、あの時には町の外に広がる草原にいくつか立っているのが見えていた、遊牧民達のテントがすっかり無くなっている事や、あのどこか尋常ではないように思えた程の町の活気も、祭りの興奮の余韻と思えば合点が行った。きっとあの日この町に集まっていた彼らは、再び大草原の彼方此方へと立去ってしまった後なのだ。

あまりに大きかった期待が外れた落胆に力が抜けてしまい、当てなく町を歩くことにも疲れてしまった。朝から何も食べて無いのでお腹も空いてきたし、宿探しは後回しにしてまず食事をとる事にしたのだが、またしても困った事には、この町には私が一人で簡単な食事を取れる様な、手頃な店など殆ど存在していない様子なのだ。

しばらく歩き回った末、漢民族とおぼしきおじさんがやっている汚く寂れた麺屋を見つけると、店頭で湯気を上げていた麺を茹でる為の大鍋を指差して温かい麺を注文した。麺が出てくるのを待つ間、当初の旅行メンバーとこの町を訪れた際に案内人の大川氏が、この町の食べ物は不味いと話していたのが思い出されたが、案の定出てきた麺は全然美味しくなかった。残り僅かな貴重な旅の時間を、なぜこんなつまらない場所にやってきてしまったんだろう……。先ほどから考えまわしと努力していたが、ついにそんな気持ちがにじみ出てきて、なんだか泣きたい気分になった。

しかし僻地の旅の食事など、食べられるだけ有難いという場面は良くある事で、旅の食事に関してはさほどクオリティに拘らない私は、とりあえずお腹が満た

されてしまい、寂れた麵屋の片隅でくつろいでいるうちに、すべての事がまあいいやと思えてきた。

何も無いチベットの町の片隅で何もせずにボンヤリするのも、私らしい旅の過ごし方じゃないか。とにかく此処まで来てしまったからには、この町に居ることを楽しまなくては損だ。今日がどうにもつまらなかったら明日康定に戻り、また別の場所に行く事だってできる。麵屋を出ると再び宿探しに通りを歩き、先ほどは入り口が門の中にある為に、入りづらくて避けていた宿を覗いていると、丁度中から出てきた男が、部屋を見てくれと私を宿の中に招き入れた。

案内された宿の2階は誰もお客がいないようでガランとしていたが、どの部屋も日当たりが良く、窓から見える景色が綺麗だ。悪くないな・・・とっていると、男がこれまでの宿泊客の感想ノートを持ってきて、私に読んでくれと差し出した。開かれていたページには過去にこの宿に泊まった日本人が、宿については褒めもけなしもしないが、宿の主人は悪い人間では無いと思う、という宣伝になっているのか、いないのか判らないような文章が書かれており、それを嬉しそうに私に読ませている主人が可笑しくて、私はこの宿に泊まる事にした。

部屋の窓からはこの町の神山が真正面に見えていて美しかった。気に入った落ち着き先が見つかった事で気持ちにゆとりができたのか、少し楽しい気分になってきていた。

さてこれからどうしよう・・・

なにせ塔公の町など小さいので、先ほどの宿探しだけで、ほぼ町中を歩いてしまったようなものだ。今から再び町に出ても退屈なだけのような気がしたが、実はこの町に関しては事前にほんのちょっぴり情報も入手していた。まだビサ延長で成都のゲストハウスに滞在していた際、宿で親しくなった日本人が中国のチベットエリアに関するガイドブックのような本を持っていて、その時から塔公は必ず訪れると決めていた私は、そこにごく簡単に載せられていた塔公の町の紹介ページを、ちゃっかりコピーさせて貰っていたのだ。

ザックからコピー用紙を取りだし改めて眺めると、町の裏手から徒歩で30分程の場所には僧院があり、その近くにはマニ石を積み上げた巨大な塚があると記されていた。他に行く当ても無かったし、これまでの道中の出来事や理塘で不思議な縁を感じるマニ石と出会った事などで、それらの仏教的なものへ惹きつけられる気持ちの強まっていた私は、この僧院まで散歩してマ

ニ石を見に行くことに決め、宿を出た。

目抜き通りから路地を折れて町の裏手に入ってみると、意外にもそれまで奥行きが無いように感じられていたこの町にも、規模は小さいが住宅地のような場所が広がっていた。遊牧民達が居なくなってしまうと、生活感のあまり感じられない町の様子は魅力に乏しいように思っていたが、裏手に回ればちゃんとこういう場所もあったのだ。そんな新しい発見を楽しみながら田舎道をのんびりブラブラ歩いているうちに、私の部屋からも眺められていた神山の山すそに何か建物が建てられているのが見えてきた。地図などいい加減にしか見ていなかった私は、あれだあれだとそちらに向かって歩いて行ったが、辿り着いてみればそれは単なる庵のような物で、考えてみれば僧院がそんなに小さい訳など無いのだった。

目的地にさほどの執着もなかったし、戻るのも面倒だった私はそのまま引き返さずに散歩を続けることにした。神山の山肌には道など無かったが標高が高い為、樹木が生えず、傾斜も緩やかなこの辺りの山は、歩きたければ何処でも歩ける。動物の踏み跡のような筋が山肌にいくつも付いていて歩きやすかった事もあり、田舎道の散歩の筈だったのが、いつの間にか道を逸れて山の懐に入り込んでいた私は、なんともピクニックに最適な雰囲気の良い美しい牧草がびっしりと茂った神山の麓に辿り着いた。

うわぁ～～きれいな場所！お弁当を持っていないのが残念な気分だ。こんな場所で昼寝をしたり読書したりして過ごすのも悪くないな・・・そんな事を思いながら、目の前に聳えている神山を見上げていた。山といっても高さはさほどでもなく、散歩を兼ねた遊びでちょっと登ってみるには丁度良い感じに見えた。このまま町に戻ってもやる事など思いつかないし、この山の上からどんな景色が見えるのか眺めてみたい。

急にそんな気持ちが湧いてきた私は、ごく軽い気持ちで目の前の斜面を登り始めていた。

軽い気持ちで登り始めてみたものの、この登山は思ったよりキツかった。まずなんといっても空気が薄い。そして暑い！

塔公は標高3700メートル程の場所にある土地で、これまでの旅路で高度順応してるとはいえ、やはり私の身体は悲しい下界人なのだ。そんな天空に近い場所で受ける太陽の光は、下界より距離が近い分だけジリジリと強烈で、山全体が草に覆われただけの斜面では逃げ場となる日陰も無い。しかも麓からは山頂のよう

に見えていた場所は、そこに辿り着いてみればまだまだ先があり、軽い散歩のつもりで宿を出た筈だったのに、いつの間にか結構な登山となっている。

いったい何故ここでこんな事やってるの〜っ!? 大汗をかきながら自問自答し、それでもハアハアと息を切らしながら登っているうち、とうとう石を積んで作った仏塔が建てられているのが見えてきて、やっと山頂に辿り着いた。

これまで登ってきた方向を振り返れば眼下には小さな塔公の町が箱庭のように見えている。神山である山の山頂に立ち、自分が神様の目線と同じ高さで、下界を見下ろしていると思うといい気分だ。

草原の向こうには塔公の景色を象徴し、土地の者が神と崇める雪山、雅拉(ジャーラー) 神山(5820m) が天を突いて聳えているのが見えていた。眺める者に有無を言わず神の存在を認めさせる圧倒的な迫力と存在感に満ちている素晴らしい雪山に鳥肌の立つ思いだ。地平線の向こうには真っ青な空を背景に、他にも私が名前を知らない白い峰の連なりが浮かんでいるのが眺められた。単なる思い付きで登ってみただけだったのにこんな素晴らしい景色が見られるなんて、この思わぬ登山は大正解だ。

それじゃあ反対側には何が見えるの? 山頂から山の向こう側が見渡せる場所まで歩いていくと、そこに見えた景色は大草原の広がる片側の風景とは違って、低い山々がいくつも重なりあって連なる丘陵地帯となっていた。そしてそんな山間にもポツリ、ポツリと家が建つ小さな小さな村があり、そこにお寺が建てられているのが見えていた。

こんな大草原の真ん中にポツンと存在する塔公の、更にその奥にも人が暮らしている場所があったのだ。それがなんだか不思議に思えた。山の上から眺められ

るお寺は太陽の光を受けて金色に輝いて見えていた。村の規模や立地に対してずいぶん立派なものに感じられ、それが土地の人々の信仰心の強さを物語っているようにも思われて、そのお寺にはなんだか妙に惹きつけられた。

あそこに行って見たいな・・・。

はじめのうち、それは叶わない願望として頭に思い浮かんだだけだった。交通の便も無いように思える奥の村へ、土地の人間ではない自分が行く事など出来ないと思えていたのだ。

だが、山の上から見渡せる丘陵地帯の風景の中で、ひと際存在感が感じられるお寺は、肉眼でハッキリ見える距離にあり、これまでの旅の間中どここの土地でも普通の人が車や馬で移動する場所を殆ど歩いて済ませていた私だ。

私の立っている山の上からお寺までの間は草に覆われた土地が続いているだけで、進路をさえぎるような物はない。このまま山を向こう側に下って、ひらすらお寺をめざして歩いていけば簡単に辿り着けそうな気がしてきた。

・・・じゃあ、行って見ようじゃないの!

そうして私は今日という日の過ごし方に、新しい目標を見つけてしまったのだ。 (次号に続く)

### 【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

\*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

### 恒例! ‘わんりい’新年会日取り決定!!

美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)がみんなを待っている!!

🌸🌸 2011 ‘わんりい’新年会へようこそ 🌸🌸

場所: 麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)  
2012年2月12日(日) 11:00 ~ 14:00

- 定員: 先着40名(‘わんりい’会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費: 1500円(会場費シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 新年会メニュー: 1.ほっこり美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」囲んで歓談  
2.余興3.お笑い福引
- 申込: メール: wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX: 042-734-5100



烏龍茶碗に残れる香のさやか

qiū zhì shénqì shuǎng  
秋至神气爽wūlóng chá wǎn fàn qīng guāng  
乌龙茶碗泛青光chá jìn liú qīngxiāng  
茶尽留清香

季语 神气爽，秋。

赏析 俗话说，与人玫瑰，手留余香。而这乌龙茶碗，如同送人玫瑰的手，也香气袅袅。品茗方式良多，其中饮乌龙茶的程序之一就有嗅闻。真可谓“嗅觉精新极，尝知骨轻松。”

因松本女士是日本茶道的老师。所以深知品茗方法。尽管乌龙茶的品尝方法与日本茶不同，但其乐趣还是相通的。

茶談義や一輪挿しの小菊添へ

chá shù zhòng lè yú  
茶塾众乐娱xìqiǎo huāpíng shēng qíngqù  
细巧花瓶生情趣tiān shàng yī xiǎo jú  
添上一小菊

季语 句话，秋。

赏析 在茶讲义的教桌上，有一只插花小瓶。松本女士将一朵菊花插上，教室顿时风雅起来。可想而知，来听茶讲座的都是风流人物，皆知菊之品性。我国清朝高旭曾吟“天生傲骨差相似，撑住残秋是此花。”估计这茶讲义的师生们都与高旭有同感吧。

'わんりい' [活動報告]

2011 夢広場・参加

2011年10月30日(日) 10:00 ~ 16:00

於:まちの駅・ぼっぼ町田

「2011 夢広場」実施予定日の3、4日前は天気予報に雨マークが付いて心配な雲行きでした。が、当日は風もなくまあまあの天候でした。25団体が出展し、仮設ステージでは40名を超す市立木曾境川小学校・合唱団をはじめ、フラダンスなど子供たちを交えた舞台が多く、例年を超えて盛り上がりました。又 'わんりい' 新年会に毎年参加頂いているオペラ歌手の崔宗宝さんが、東日本大震災への鎮魂歌として、声量豊かに「アメージンググレイス」をボランティアで歌ってくださり会場の感動を呼びました。

'わんりい' は、例年通りのエスニック焼鶏と、会員たちが手作りした、小豆餡、ナッツ餡、小豆&ナッツ餡、ココナッツ餡の4種類の手づくり月餅を販売、売れ行き上々でした。日頃お会いする機会の少ない会員の方がお出で下さったり、他の団体の方たちとの交流などお祭を楽しみました。



アメージンググレイスを歌う崔宗宝さん



ポスターで満艦飾の 'わんりい' のブース



アフリカンコネクションの竹田悦子さん(写真中央)が、ご主人のガスパレイさんとお二人のお子さん連れで見えました。花ちゃんはお父さんの腕の中で熟睡中でしたが、曩クンとは生まれた時以来の対面ですっかりお兄ちゃんになっていてびっくりでした。

【わんりいの催し】 23年度町田市・つながりひろがる地域支援事業/対象事業

## つなげよう!ひろげよう!地域の和と輪

聞いてみよう!鶴川地区に住む留学生たちのスピーチ!! 楽しもう!中国の民族音楽!!



- |                      |         |
|----------------------|---------|
| 1部: アンデスの民族楽器・ケーナ演奏  | 13:00 ~ |
| 2部: 国士舘大学・留学生たちのスピーチ | 13:20 ~ |
| 3部: 中国民族音楽演奏         | 14:15   |

● 2011年12月18日(日) 13:00~15:45 (開場12:30)

● 場所: 鶴川市民センター・ホール

町田市大蔵町1981-4 ☎042-735-5704  
鶴川駅0番バス停野津田車庫行「下大蔵」下車  
鶴川駅1番バス停若葉台行「鶴川市民センター前」下車

● 参加: 500円



- ◆ 中国民族楽器演奏: 銭騰浩(中国笙)、曹雪晶(二胡)、林敏(揚琴)
- ◆ 演奏曲: 春光花月夜(揚琴)、さくら変奏曲(揚琴)、山門峽暢想曲(二胡)  
荒城の月(二胡)、鳳凰展翅(笙)、流水歎歌(笙)、花好月圓(合奏)  
喜洋洋(合奏)、蘇州夜曲(合奏) 他

◆ ケーナ演奏: 山下孝之 オリジナル曲

主催: 日中文化交流市民サークル 'わんりい' 後援: 町田市/(財)町田文化・国際交流財団

問合わせ&申込み: ☎/FAX042-734-5100 'わんりい' 参加券: 久美堂本店 ☎ 042-725-1330



### 素直で飾らない、素敵な若者たち・留学生の皆さんとお話ししてみよう!

自由に交流できるように立食で軽食ですが、当日の催しの前に、留学生の皆さんたちといっしょにお昼を頂きながら、直接お話しできる交流タイムを設けました。皆さんのご参加をお待ちしています。

- ◆ 先着20名(わんりい会員と関係者のみ) 無料、要申込みです。ご希望の方は、上記 'わんりい' までお申し込みください。
- ◆ 時間: 11:20 ~ 12:10
- ◆ 場所: 鶴川市民センター・ホール

### 新年スペシャルCONCERT

ソプラノ バス バリトン  
森麻季 × 崔宗順・崔宗宝兄弟

— 興奮と感動の究極の融合 —

司会: 青島広志

ピアノ: 新居由佳梨 ゲスト: 王晶(二胡)

- 2012年1月12日(木) 18:30開演
- 会場: 海老名市文化会館・大ホール  
〒243-0434 海老名市上郷 476-2  
小田急線・相鉄線「海老名駅」西口徒歩5分  
JR相模線「海老名駅」東口徒歩5分
- 全席指定席: S席 4,000円 A席 3,000円
- 主催: 崔宗宝音楽事務所
- チケット: 崔宗宝音楽事務所 / ☎046-235-2716

### 【'わんりい'会員の催し】

尺八奏者・小濱明人さんのちょっとユニークな  
投げ銭制・ライブのお知らせ

【小濱明人 Solo Solo vol.24】

2011年12月 9日(金) 19:00 ~

- ◆ 場所: 世田谷区祖師谷大蔵 Cafe MURIWUI
- ◆ 問合先: Cafe MURIWUI(03-5429-2033)  
〒157-0072 世田谷区祖師谷4-1-22  
一文書店3F
- ◆ ゲスト: 山中信人(津軽三味線)



### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に 'わんりい' の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

### 【12月の定例会と新年号の発送日】

- ◆ 定例会: 12月8日(月) 13:30 ~ (田井宅) 12月18日の催しを中心に話し合います。
- ◆ 2012年新年号のおたより発送日: 12月29日(木) 13:30 ~